

## 3月7日 四旬節第3主日

出 3:1～15    Iコリ 10:1～12    ルカ 13:1～9

### 1. ルカ

v.3, v.5 「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

ローマ皇帝によって任命された総督ピラトの権力に対して、これに反抗する反体制的な、今日で言うテロリスト集団を掃討するための、小規模な軍事行動が頻発していた当時の状況から何を読み取るかは、人によってまちまちです。しかし、イエスには明確な独自の判断基準があったことを、福音書は伝えています。それは、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マコ 1:15)です。

イエス御自身の、そして原始教会の宣教の核心である“神の国到来の危機”を、多くの現代人は単なる聖書の中の昔話だと思っています。しかしそう考えることによって、実際には聖書が、“現代人には理解困難な書物”になっているのです。“復活し、天に昇って、全能の父である神の右の座に着き”(使徒信条)、やがて“生者と死者を裁くために、栄光のうちに再び来られる”(ニケア・コンスタンチノーブル信条)イエスの叱責の聲が、聞こえるではありませんか。「あなたがたは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。」(マコ 12:24)

「もう三年もの間……」(v.7)、つまり十分に永く、これまで神は忍耐してくださって来ました。「あなたは、神の裁きを逃れられると思うのですか。あるいは、神の憐れみがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と寛容と忍耐とを軽んじるのですか。」(ロマ 2:3-4)

### 2. Iコリ

v.11 「これらのことは前例として彼らに起こったのです。それが書き伝えられているのは、時の終わりに直面しているわたしたちに警告するためなのです。」

私たちは歴史から、多くの教訓を読み取ることが出来ます。聖書も歴史の書物ですから、そのような読み方をして、現代にもっと平和な世界を実現するための指針を得ることが出来ると、ある人々は考えています。w.7-10に言及されている旧約聖書の出来事を反省材料にして、自分たちは罪を退け、正しい歩みをしようという訳です。

しかし、新約聖書から私たちが聞く使徒たちの宣教の核心は、私たちは「時の終わりに直面している」という点にあります。すでに初代教会の頃から、「主が来るという約束は、いったいどうなったのだ。……世の中のことは、天地創造の初めから何一つ変わらないではないか」(IIペト 3:4)と言う人たちがいました。まして21世紀の現代には、使徒たちが伝えた福音の終末的使信を受け入れることの出来ない人が多いのは、決して不思議ではありません。それでも、これは聖書の福音の核心であって、このことへの信仰を抜きにしては、聖書も理解出来ないし、“ともにささげるミサ”も空しいのです。

### 3. 出

v.14 「わたしはある。わたしはあるという者だ。」

このことから導き出される結論として、次の二つを指摘しておきましょう。まず第一は、「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられる」(王上 17:1)という信仰です。教会の主である復活のイエスは、今も私たちに「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」(マコ 6:50)と語っておられます。

第二に、神の民の存在の根拠は主にあるということです。歴史の中のキリスト教会はいつも、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタ 28:20)という復活のイエスの言葉によって、命を与えられて来ました。

この神の民の選びという事実が、紀元前 8 世紀の預言者アモスにおいて、“イスラエルは神の審判の対象以外の何物でもない”と解釈され(アモ 3:1-2)、そして新約聖書に至って遂に、教会こそは“キリストの血によって義とされた”民であり、まさにその終末の裁きから救われると宣言されました(ロマ 5:9-10、1テサ 1:10 他)。

v.15 「これこそ、とこしえにわたしの名、これこそ、世々にわたしの呼び名。」

私たちキリスト者にとって救い主の名は、「十字架につけられたキリスト」(1コリ 1:23)、「罪のために唯一のいけにえを献げて、永遠に神の右の座にお着きになったキリスト」(ヘブ 10:12)、「栄光のうちに再び来られるキリスト」(ニケア・コンスタンチノーブル信条)、「来られるのを、わたしたちは待っている」(フィリ 3:20)キリスト以外ではあり得ないことを、信じて感謝しようではありませんか。 アーメン。

## 3月14日 四旬節第4主日

ヨシュ 5:9~12    IIコリ 5:17~21    ルカ 15:1-3,11-32

### 1. ルカ

この有名な“放蕩息子の譬え話”を正しく理解するために、vv.1-3を前提にすることが必須の条件であることを、十分に理解する必要があります。なぜなら v.29の“兄”が、当時のユダヤ人を指していることは明らかですが、この物語りを聞く現代のキリスト者にも、自分たちこそが vv.1-2の“罪人”であることを忘れて、ただの“優しくして(v.20)、気前の良い(マタ 20:1-15)”天の父の話として、教訓的に読む傾向があるからです。私たちは無意識の中に、v.29の“兄”の立場に立ってしまっていることがあるのです。“私は何年も神様に仕え、カトリックの教えに背いたことは一度もありません”と言って……。

そうではなくて、私たちは皆「以前は自分の過ちと罪のために死んでいた」(エフェ 2:1-5)のに、「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされる……」(ロマ 3:24)という、神の愛と恵みがこの譬え話の主題なのです。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません」(v.21)とは、「では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました」(ロマ 3:27)ということです。ですから、「福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。」(ロマ 1:17)

私たちキリスト者は、「キリスト・イエスによる贖いの業」から切り離して、この“放蕩息子の譬え話”を独立した物語りとして読むなどということを、決してしてはならないのです。

### 2. IIコリ

vv.18-19 「これらはすべて神から出ることであって、…… 神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、……」

これが、使徒パウロが説いて止まなかった「和解の言葉」(v.19)、すなわち福音です。彼は ロマ 1:16に、「わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力(δύναμις Θεου εἰς σωτηρίαν)だからです」と、高らかに宣言しています。

私たちは洗礼の秘蹟によって、このキリストの死に結ばれて罪に対して死に、新しい命に生きる者となった(ロマ 6:3-11)のですから、「新しく創造された者なのです」(v.17)。“私は何年も神様に仕え、カトリックの教えに背いたことは一度もありません”ということではなくて、「大切なのは、新しく創造されること」(ガラ 5:15)なのです。

「人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、(キリストの贖いの業への)信仰による」(ロマ 3:28)ということが、大いに強調されなければなりません。その対象が“キリストの贖いの業”ではないような、た

だの盲目的な信心や敬虔が、しばしば福音に覆いを掛けている(IIコリ4:3-4)からです。四旬節は、私たちすべての信者がイエス・キリストの受難と死によって成し遂げられた“永遠の贖い”(ヘブ9:12)に目を向け、「主イエスを復活させた神が、(終わりの日に)イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださる」(IIコリ4:14)ことを学ぶ、大切な期節です。

### 3. ヨシュ

イスラエルの民がエリコの平野で過越祭を祝ったのは、神がエジプトでの恥辱を取り除いてくださったからでありました。神はその民を、エジプトの国、奴隷の家から贖って(出15:13)、御自分の宝の民とされました(申7:6)。そしてその日以来、「マナは絶え、イスラエルの人々に、もはやマナはなくなった」(v.12)のでした。イスラエルの民はこのようにして、年々過越祭を祝って主の大いなる救いを記念する民になったのです。

私たちのミサは、贖われた民である教会にとっての、キリストの死と復活の記念です。“ミサを生きる”(ミサ典礼書の総則 初版の序文/長江恵司教)とは、単に忠実にミサに参加するということではなくて、「この御子において、その血によって贖われ、罪を赦された」(エフェ1:7)ことを信じて受け入れ、神の国を受け継ぐ希望(ロマ5:1-2、エフェ1:18)を生活のよりどころにして生きる(Iコリ15:1)ということです。

「このような原理に従って生きていく人の上に、つまり、神のイスラエル(教会)の上に平和と憐れみがあるように。」(ガラ6:16)                      アーメン。

## 3月21日 四旬節第5主日

イザ 43:16～21    フィリ 3:8～14    ヨハ 8:1～11

### 1. ヨハ

v.11 「イエスは言われた。“わたしもあなたを罪に定めない。”」

イエス・キリストによる罪の赦しというテーマは、カトリック教会のカテキズムでは“義化”という項目で取り扱っています。それは伝統に従った非常に建徳的な教え方であって、これを学んだ信者はたいてい“結論を得た”という気分になるものです。しかし、カテキズムは聖伝と聖書に基づいて生み出された教えですから、私たちはその教えの源泉に遡って理解することが大切です。主日のミサで、カテキズムではなくて聖書が会衆に向かって朗読されるのは、そのためです。

主イエスがこの女に、「わたしもあなたを罪に定めない」と言われたことで、これで目出度く問題は解決したと安易に理解して良いのでしょうか。我が国では“人の噂も75日”などと言いますが、それで結果として“もう誰もあなたの不祥事を責めたりしない”ということにはなっても、過去の罪の記録が抹消されたわけではありません。聖書は、そんなことを“罪の赦し”と言っているのではないのです。

この女がイエスと共にいる限りでしか、この物語りは意味を持たないことに、私たちは気づく必要があります。つまり“キリストに結ばれている(έν Χριστω)”という前提で、“もはや罪に定められない”という“赦し”が成り立つのです(ロマ 8:1)。罪を赦されるとは、人がもはや再びキリストを必要としないような、そんな正しい人間に“変身”してしまうことではないからです。

### 2. フィリ

v.11 「何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」

“復活”とか“永遠の命”という言葉ほど、多くの人に誤解されている聖書の言葉はありません。その原因は明らかです。すなわち、「キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義」(v.9)を理解していないからです。

“信仰による義”という教理は、“復活”や“永遠の命”と同様に、聖書から切り離して議論すると、ただの空論になってしまいます。それらは普通概念ではなくて、聖書独自の用語だからです。どんなに翻訳を工夫しても、聖書から離れて理解出来るようにはなり得ないのです。

先ず第一に、人は多くの善い行いの一つのように、信仰という行為によって義人になるのではありません。人は自らの信仰を誇ることなど出来ないのです(ロマ 3:27)。使徒パウロは“信仰によって救われる”という表現を使いましたが、それに直ちに続けて、「このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です」(エフェ 2:8)と付け加えました。「神の義」は、神の恵み深い救いであって、人はただ信仰によってこれを感じて受けるのです(ロマ 1:17, 3:22)。“信仰”とは、人間の側の主観的な感情であるよりは、むしろ神の

側から無償で与えられる恵みへの従順であって、「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。」(ロマ3:25) 私たちはそのことを信じて、洗礼の秘蹟によってキリストに結ばれました(ロマ6:3-11、IIコリ5:17-19)。

第二に、“信仰によって義とされた”とは、終末論的な事柄であることを忘れてはなりません。私たちキリスト者にとって、それは今すでに“先取りとして”現実でありつつも、しかも「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞」であり、「目標を目指してひたすら走る」対象なのです(v.14, ロマ5:1-2 参照)。

### 3. イザ

v.19 「見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている。あなたたちはそれを悟らないのか。」

第二イザヤ(イザ40-55章)においては、“主に望みを置く”“待ち望む”という表現が、“信仰”という言葉に代わって用いられています。すなわちその預言は、当時の時代状況に即しつつ、濃厚に終末的色彩を帯びていました。イスラエルの神は創造者であると同時に、何よりも歴史の支配者であることが強調されています。

神の国の到来を待望する信仰を保留して、必要なのは現代という時代の困窮に対応することであり、それがキリスト教の第一の責任であると主張する人々が多いのです。終末的な神の国の話を夢見るのではなくて、現実の世界における政治的、経済的、社会的な正義と公平を追求することこそが、教会の使命だと考えるのです。そこでは、キリスト教という人間の集団の努力と実績に、すべての関心が集中されています。

しかし、聖書は一貫して、神が、神こそが歴史の支配者であるということを語っています。私たちは今朝の朗読配分からそのことを聞き取るとき、初めて神のことばを理解出来るようになります。「わたしはこの民(教会)をわたしのために造った。彼らはわたしの(来るべき神の国の)栄誉を語らねばならない。」(v.21)

アーメン。

## 3月28日 受難の主日

イザ 50:4~7    フィリ 2:6~11    ルカ 23:1~49

### 1. ルカ

v.34 「そのとき、イエスは言われた。“父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。”」

私たちが知っている過去のキリスト教では、人々はこのイエスの言葉に、神の大いなる寛容とその愛の広さへの感嘆を語るのが常でした。しかしそれは、ロマ 2:4におけるような意味ではなくて、むしろヒューマニスティックなキリスト教の愛の精神を教える模範としてでありました。

使徒たちの宣教活動の根拠が、この受難の出来事において“何が起こったのか”、“イエスは何をされたのか”についてであった(使 4:8-12)ということ、現代のキリスト者は聖書を通して再確認する必要があります。実際、多くの信者が、“ここで何が起こったのか”を、必ずしも使徒たちが伝えたようには理解していないからです。

使徒たちが宣べ伝えた福音において、“神の子の受難と死”は、常にその核心部分でありました。私たちキリスト者は、御子イエスの死によって神と和解させていただいたのであり(ロマ 5:8-11、II コリ 5:18-19)、「わたしたちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから」(ヘブ 4:14)、この“神の子への信仰”をしっかりと保とうと勧められています。私たちが将来復活して神の国を受け継ぐ希望の根拠は、「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか」(ロマ 8:32)ということなのです。

受難の出来事において、「キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。」(ヘブ 5:8) その従順のゆえに御子は、「十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。」(I ペト 2:24)

カトリック教会ではどこでも、四旬節には回心式が行われます。回心が各自の犯した罪の悔い改めを含むのは当然ですが、何よりも忘れてはならない第一のことは、私たちのために死んで復活された神の子イエスに立ち帰ることです(I ペト 2:24-25)。私たちはこの期節に再び、「見よ、この人だ」(ヨハ 19:5 / 口語訳)と呼ばけられているのです。

### 2. フィリ

vv.8-9 「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。」

イエスが神の子であるということと、その従順は不可分な概念なのです。古きイスラエルはその不従順によって神の子として失格し(ホセ 11:1 以下)、それに代わってイエスは(マタ 2:15)全き従順によって「神の

子と定められた」(ロマ1:4)と説明されています。このようにして、原始教会の信仰宣言である「イエス・キリストは主である」(v.11)が成立しました。

「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦され……、(神の国の)相続者とされました。」(エフェ1:7,11) そして「イエス・キリストは主である」と信じて、「約束された聖霊で証印を押されたのです。この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、……。」(エフェ1:13-14)

### 3. イザ

v.7 「わたしは顔を硬い石のようにする。」

古きイスラエルは、その不従順のゆえに「その顔を岩よりも硬くして、立ち帰ることを拒みました。」(エシ5:3) 神の子イエスは、その従順のゆえに「十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。」(ヘブ12:2)

「彼が打ち砕かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」というイザ53:5の言葉と結びつけることによって、イエスの受難の物語りは本当に“福音”になります。イザ50:4-9は“僕の歌<3>”であり、52:13-53:12は“僕の歌<4>”で、神の子イエスは“僕なるメシア”としてその従順を父なる神にお捧げになりました。このイエスは、今は死を打ち砕いて復活された勝利の主です(1コリ15:57)。

すべての信者が神の子イエスのところへ戻って来る(1ペト2:25)聖週間でありますように。

アーメン。